

純喫茶「やどり木」

大場
恭秀

《土砂降りの音、遠くに雷の音
雨の中を駆ける3人の足音》

貴裕「ヒヤー、だめだ、こりやあー」

由紀「無理、無理、うちまでもたないよー」

亮「雨宿り、雨宿り、つとー！」

由紀「ねっ、ねっ、あそこ、入ろうよ」

貴裕「あれー、こんなところに、こんな店、
あつたっけー」

亮「おっ、なにに、『純喫茶 やどり木』
だって、純喫茶ってなんだろう？ 変な名前
だな」

《雷鳴》

貴裕「わっ、近いぞ！」

亮「やばい、やばいよ！ だんだん近くな
るよ」

由紀「ほら、ほら、ぐずぐず言っていないで、
とにかく入ろう」

《カラン、カラン（喫茶店のドアについて
いるカウベルの音）》

タイトル 純喫茶 やどり木

《カラン、カラン（店のドアが開く）》

由紀「あの一」

早苗「いらつしやい！ まー、大変、ずぶぬ
れほら、そのまま、そこで、そのままいま、
タオルもつてきてあげるから」

貴裕「あつ、いいんですか？」

早苗「はい、どうぞ、それにしても、すごい
雨ね」

亮「ラッキー！」

由紀「わー、ありがとうございます、ほんと、
助かります」

貴裕・亮「あつ、これ、ありがとうございます
した！」

早苗「まあ、礼儀正しい学生さんだこと
いいの、いいのよ、気にしなくて！
ご覧の通りお客さんも、いないし、ゆっく
り雨宿りしていつてくださいな」

由紀「あの一」

早苗「あー、カウンターの人ね 気にしなく
ていいの、あの人はいつもあの席に座って、
時間と遊んでいる暇人だから、ねっ、修平
さん！」

修平「はいはい、暇人ですよってか
ほら、君たち、そんなところに突っ立った
ままだと風邪引いちやうぞ

そのテーブルに座って、座って！ 早
苗さんも、はい、商売、商売」

早苗「あら、あら、雨宿りだけで、かまわな
いのよ」

貴裕「僕たち、どうせ、どこかの店に入って、
打ち合わせするところだったから」

亮「急に、どしやぶりになっちゃって」
由紀「ちよつと、おなかも空いてるし、あの一、
メニューありますか？」

早苗「まー、それじゃあ、改めていらつしや
いませ、お客様、なににいたしましたし
ようか？」

亮「あれ、シンプルなメニュー！」

修平「おっ、シンプルとは、しゃれた表現だ
ね。だいたい、店の中を見回してごらんよ、
カウンター席に、テーブル席が3つ。
60歳をいったりきたりの、美人ママが一
人で切り盛りしている、それは、それは、
レトロな店で、おかしいでしよう？
立派なメニューを差し出して、お客様、何
にいたしましたようかって言うのは」

早苗「おや、ひどい、言われようだこと
まあ、美人ママっていうのは、当たって
るからいいか。
ごめんね、たしかに飲み物は、コーヒーと
紅茶、ココアにミルクだけね。
コーヒーは、ブルマンとか、キリマンと
か言わないでね。
これだけは、ちよつとこだわりがあつてね。
当店オリジナルのブレンドコーヒー一点な
の。もし、コーラとか、ジュースが、飲み
たかつたら、悪いけど、この雨の中をかけ
ていつて、外の自販機で、お願いね。君た
ちは持ち込みOKよ！」

修平「ほらね、なんてわがままな店か、わか
つただろう」
由紀「食べるものはなにかありますか？」
早苗「そうか、みんな、おながが空いていた
んだっけね
今日は、この大雨の中、来てくれた貴重な
お客様だから、早苗さん特製のたまごサン
ドを作つてあげる」

由紀「あの一」
早苗「いいの、これは、おごり、めつたに、

若い人はこないから、なんだか、とつても、うれしくなっちゃって！」

貴裕「すいません、タオルまで貸していただいたうえに・・・」

修平「若い子が、なに、恐縮がっているんだよ。ラッキー、ラッキーでいいの」

亮「スイマセーン、じゃあ、コーヒーにしようつと」

貴裕「ほくも、コーヒーおねがいします」

由紀「わたしは、紅茶にしてみようつと、レモンテイ、いいですか？」

早苗「はい、コーヒー二つにレモンテイね」

由紀「あのー、ちよつと聞いてもいいですか？表の看板・・・」

貴裕「そうそう、純喫茶ってなんですか？」

早苗「あーあれね、大層な意味はないのよただ、お酒のたぐいは、置いてませんよ、つてことなのもう、死語になっちゃったかなそのての話は、その、団塊おじさんが、得意だから、コーヒーが入るまで、退屈し

のぎにでも聞いてみるといいわよ、ねっ周平さん」

修平「団塊おじさんって、まったく・・・昔はね、喫茶店にもいろいろ個性があつてね名曲喫茶といつてね、クラシック、そう、ベートーベンとか、モーツアルトとかのあれが、一日中流れているわけさうだジャズ喫茶なんていうのもあつたなもちろん今も、何店かは、残っているだろうけれど、ジャズのレコードで、埋まっているカウンター

のなかに、いかにもそれらしいマスターがいて、リクエストなんかしてみると、山のようなレコード群のなかから、何の苦も無くサツとひっぱりだすわけ客はといえば、ほとんどが一人客でコーヒーとタバコ、瞑想して曲の中に入り込むわけ、薄暗い店内に、会話は一切無い状態・・・想像できるかな」

亮「なんだか、無気味ですね、自分の部屋で聴けばいいよな・・・」

修平「ま、そういうことは、ちよつと違うんだな、うまく、言えないけれど、あの店の雰囲気、あの店の音響で、あのマスターのあの店であつて言うのじゃなきゃだめなわけよ」

由紀「うーん、なんだか良くわかりません」

早苗「今だつて、いろいろあるわよね、ネットカフェって言うの？インターネットができる喫茶店とか、ほら、『ご主人さま、お

かえりなさいませ』って言う・・・」

亮「メイドカフェだ」

修平「そうか、昔の呼び名に、哀愁を感じているのは、団塊世代の俺たちだけつてことかあーあ、時代のニーズに合わせていろいろ出てくるもんだね」

《雷鳴》

亮「わー、近くに落ちたぞ、きつと！」

早苗「ますます、ひどくなるわね、ハイッ、おまちどうさま」

修平「こりやあ、停電になるかもしれないぞ」

早苗「そうね、ろうそく、用意しておいたほうがよさそうね、」

《カラン、カラン（店のドアが開く）》

早苗「いらっしやいま・あら、おまわりさん！」

警官「だれか、逃げ込んできませんでしたか？その角のコンビニで、強盗事件がありましてね」

早苗「だれも」

警官「いやあ、それならいいんですけど、気をつけてください犯人は、刃物を持っているみたいですから」

修平「店員は、大丈夫ですか」

警官「はい、刃物は、振り回したものの、けが人はでなかったようです」

早苗「よかつたわ、どんな人か、わかってるんですか？」

警官「えーと（手帳をとりだし）年齢25歳くらい、身長は170センチ前後、黒っぽい野球帽のようなものに、黒っぽい上下のジャージ姿と、いうことです」

修平「要するに黒づくめの若者ということか」

警官「くれぐれも用心してください。なにかありましたら、交番は、出払っていますので、110番通報してください」

早苗「ごくろうさまです」

警官「じゃあ、失礼します！」

《店のドアが開閉する（カウベルの音）》

早苗「あーあ、いやな時代になってきたわね、コンビニ強盗だつて」

修平「そうだよな、札幌や旭川じゃなくて、富良野のコンピニに、強盗だって」

早苗「都会も田舎も無いわね、強盗事件が、身近なところで起こる時代になったのね」

亮「あの一、早苗さん、あ、早苗さんって、呼んでもいいですか？」

亮「コーヒー、すごくおいしいです、酸味が程よくて」

修平「おつ、言うねえ、だろう！」

亮「うちの父親がコーヒー好きで、中学のときからよく飲むようになったんです。今度連れてきていいですか」

修平「いいね、いいね、ほら病み付きになるだろう。」

に、しても、どう教育したら、コーヒー飲み、親父と二人で、などという孝行息子が、できるのかね！」

早苗「あら、うちだって、父親と息子は、仲良かったよ、ホラッ」

由紀「あつ、山の写真、いっぱい飾っているんですね」

亮「山頂で肩組んでいるの、息子さんとお父さんですよ」

貴裕「なんかいいですね、息子さん、僕らと同じ歳くらいかな？」

早苗「そうよ、高校2年生、男前でしょ、いつまでたつても、高校2年生」

由紀「えっ？」

早苗「いいよね、死んじまったら、いつまでも、歳とらなくて」

修平「なに、強がり言ってるんだか・・・ちやうど、この写真の年の、冬休みに、大学受験前のこれが高校生活最後の山登りだつて、ご主人と二人で、山に入って、そのま

ま・・・二人とも・・・」

早苗「わたしは、おいてきぼり・・・それに、あのこが、生きていたら、30歳だもの・・・ずーっと昔の話よ。」

あら、あら、暗い話になってゴメンね、

ところで、君たちは、部活の帰りなの？」

貴裕「部活といっても、正式な学校のクラブじゃなくて、僕たち三人で、老人クラブなんかを回るボランティアをやっているんです」

由紀「で、こんどは、ちよつと趣向をこらして、寸劇仕立てで、面白いものはないかと相談しようと思つて」

修平「ほら、早苗さん、聞いた？ 日本も捨てたものじゃないね。」

こんな若者が、日本にも、富良野にもいるんだよ、オレ、涙が出てきちゃうよ」

亮「あつ、そんな立派なものじゃないんです。僕たち三人とも、おじいちゃん、おばあちゃん子で、去年、由紀の、おばあちゃん

んが亡くなったとき・・・」

由紀「そう、私のおばあちゃん、亡くなる二

年ほど前から認知症がひどくなって、私の顔と、私のお母さんの区別が付かなくなつ

たんです」

貴裕「で、由紀が、ものすごく落ち込んでいたので、なんとかしようと、亮とおばあちゃんの施設に行ったのが、きっかけなんですよ」

亮「そうそう、貴裕がヘタクソな絵を描いて、紙芝居をやったんだよな」

貴裕「これがけっこう、うけちゃって、おれたちも、ちよつと、調子づいて・・・」

由紀「うちの、おばあちゃんだけでなく、同じ部屋のおばあちゃんたちも、すごく喜んでくれたの」

貴裕「僕ら3人は、小学生、中学生合わせて15人ほどの、小中学校の卒業で、今年なんかの新一年生は、たった一人だつて」

由紀「私たちのときは、この3人で・・・」

亮「それから、高校も一緒だから、ガキの時からずーつと一緒で、もしかしたら、家族や兄弟よりも、わかりあえる部分があつて・・・」

修平「いい話だねー、早苗さん、たまごサンド、オレの伝票につけといて！」

早苗「だめ！ わたしが、ご馳走するつて言ったでしょう、ぜつたいにわたしのおごり！

そうそう、早く作らなくちゃ、君たちも、がんばつて」

修平「早苗さんは、早くカウンターのの中に入った、入った！」

貴裕「じゃあ、はじめようか」

亮「うーん、ちよつと考えてきたんだけど

さ、『桃太郎のその後』ってね」

由紀「なに、なに？」

亮「桃太郎がね、鬼退治をした後、その戦いのキズを癒そうと、海へ、行くわけ、でね、浜辺を歩いていると、亀をいじめている奴がいるわけよ」

貴裕「浦島太郎か」

亮「そう、桃太郎の浦島太郎、で、竜宮城から帰ってきて、玉手箱を、開けるわけ」

由紀「じゃあ、桃太郎がおじいちゃんに、なっちゃうよ」

亮「でね、おじいちゃんになった桃太郎は、孤独感にさいなまれて、犬を飼うわけよ」

修平「あつ、わかった、ここほれワンワンの、『花咲かじいさん』だな」

亮「あれ、聞いてました？ で、最後は、おじいさんになった桃太郎が、枯れ木に花を咲かせて、メデタシ、メデタシってね」

貴裕「くっだらねー」

早苗「おもしろそう、話してわね、ハイ、たまごサンド！ いっぱい食べて」

由紀「ね、今の話は別として、おじいさんも早苗さんも、私たちとやりませんか？」

修平「修平さんって、呼んでくれよ、」

貴裕「それじゃあ、修平さん、僕らと一緒にやりましょうよ、どうせ暇人なんですよ」

修平「暇人はないだろう、でもいいのかい、私のようなおじいさんが参加しても」

由紀「別に、学校のクラブとかじゃないし、早苗さんも、お願いします」

早苗「あら、あら、私も参加させてもらえるの、うれしいわ」

修平「ア、思い出した、早苗さんは、学生の頃、演劇部のマドンナだったって」

早苗「うそ、うそですよ、でも、みんなで考えればいい知恵がでて、おばあちゃん、おじいちゃんに、きつと喜んでもらえるものができるわね」

亮「うん、うん、おもしろくなってきた」

由紀「わ、なんだか、楽しくなってきた」

《落雷》

由紀「あつ、電気が・・・」

修平「停電だね、こりゃあ！ 早苗さん！」

早苗「はい、はい、あわてない、あわてない、貴裕くん、携帯の灯り、貸して！ まずは、ロウソク、ロウソクつと、あつ、このランプ使えそうね」

修平「さすが、山好きだんなの妻だねえ」

早苗「主人の数少ない遺品の一つなの、ちゃんと、手入れしてるから、きれいでしょう、テーブルの上に置きましょうね」

貴裕「なんか、すつこくいい雰囲気、山小屋にいる感じ」

由紀「ほんと、ポーっとランプの灯りを見ていたい感じ」

亮「たまに、停電もわるくないか」

《カラン・カラン(店のドアが静かに開く)》

男「あの一、いいですか？」

早苗「いらっしやいませ」

男「ドアを押してみたら、開いたのでもできませんけれど・・・」

早苗「少しの間、雨宿りさせてもらっていいですか？」

早苗「タオル、おもちしましたよか？」

男「あ、だいじょうぶです、手ぬぐい持ってますから」

早苗「暗いですから、足元に気をつけて、その席にお座りください。いま、ロウソクをお持ちしますから」

由紀「修平さん、修平さん、黒ずくめ」

修平「この暗さだからな」

貴裕・亮「うん、うん」

由紀「身長170センチ前後」

修平「この暗さだからな」

貴裕・亮「うん、うん」

亮「けつこう、やばいんじゃない、電話、電話、携帯、携帯」

由紀「まって、なんだかおとなしそうな人みたい」

修平「おとなしそうって、由紀ちゃん、この明るさで、よくみえるね」

由紀「だって、言葉遣いや、動作が、なんとなく・・・それに、あの声・・・」

早苗「こらつ、みんな聞こえているのよ、ごめんなさいね」

男 「いえ……」

由紀 「だんだん目が慣れてきた、あつ、思い出した、もしかしたら、いとこの……」

亮 「あつ、ついた！」

修平 「おつ、停電終了！」

貴裕 「わっ、黒の上下のジャージ！」

由紀 「あつ、やつぱり！ 本家のノブさんだ！」

男 「由紀か？ なんで！」

貴裕 「ほんとだ、佐々木さんちの信義さんだ！」

男 「由紀！ なんで……なんで、お前たちも……」

亮 「うそでしよう、ねえ、信義さん、コン

ビニ、ちがうよね」

男 「るっせー！ お前ら、ガキ共に、なに

がわかる！ おれに、近づくな！」

早苗 「だめ、だめ！ ナイフは、だめ！ カ

ウンターに置きなさい！」

由紀 「ノブさん！」

男 「るっせー！」

由紀 「ノブさん、やめて！」

修平 「落ち着け！ ほら、きみらも、落ち着

け！ あんたも、顔も名前もわかっちゃつ

たんだから、逃げたら、だめだ！」

早苗 「ねっ、自首しましょう、私が付いて行

ってあげるから」

男 「るっせー！ 余計なお世話だ！」

《イスが激しく倒れ、乱れる足音》

早苗 「だめ！ 行っちゃだめ！ 今逃げちゃ

だめ！ 修平さん、ドアを押さえて」

由紀 「亮！ 貴裕！」

《ドアのカウベルが激しく鳴る》

早苗 「とにかく、座って」

修平 「由紀ちゃん、もうだいたいじょうぶだから、

みんなも、そんなところに突っ立ってない

で、すわった、すわった」

修平 「よく考えてみなよ、今逃げて、万に一

つ捕まらなかつたとしても、ずーっと、う

しろめたさがついてまわるんだよ」

由紀 「ねえ、ノブさん、一つ聞いてもいい？」

男 「ああ……」

由紀 「去年のおばあちゃんのお葬式の時、

どうして出なかつたの？」

男 「ここに、いなかつたから……」

貴裕 「おばあちゃんの死に目にも会えないな

んて」

由紀 「ノブさんって、おばあちゃんの自慢の

孫だったじゃないですか。初めての、男の、

うち孫だつて、喜んでいたのに」

早苗 「ハイ、とにかく熱いコーヒー一杯飲み

なさい。どお、少しは落ち着いた？」

男 「うちにきた時、すぐ、わかつたわ、あな

たは、捕まるつもりで、きたのよね」

修平 「そうか、君らがいたものだから、びっ

くりして、逃げようとしたのか」

貴裕 「信義さんは、愛知の自動車工場で働い

ているって聞いてたけどな」

男 「あそこは、2年ほどで、派遣切りにあ

つて、再雇用待ちで、待機していたけれど、

そのうち金がなくなつて……」

早苗 「どうしたの？」

男 「農家を継ぐのを嫌つて、勝手に飛び出

したもんで、親には、泣きつげなくて……」

男 「親に内緒でつて、ばあちゃんに金を送

つてもらつて、その金で、横浜の派遣仲間

のところに転がり込んだ……」

由紀 「それが問題になつたのよ、ノブさんは、

知らなかつたの？ おばあちゃんが、郵便

局で、お金を送つたものだから、局の東西

さんが、振り込め詐欺にあつたんじゃない

かつて心配して、おじさんに、報告したも

のだから、おじさんカンカンになつて、『お

袋が甘やかすから、ノブのやつは、いつま

でも一人前になれないんだ』つて

『金さえ送らなきゃ、根性無しのあいつは

うちに帰つてきたんだ』つてことあること

にいうものだから、おばあちゃんも居づら

くなつて、うちへ、くるようになったのよ」

男 「そんな……」

由紀 「うちは、両親共働きたから、けつこう

助かつて……わたしは、学校から帰つた

ら、いつもおばあちゃんといっしょだから、

亮や、貴裕も、おばあちゃんが大好きで……」

貴裕 「おばあちゃんは、いつも信義さんのこ

と気にかけていたよ」

亮 「ノブは、毎日ちゃんと、ご飯食べてい

るかな？ とかあの子は、人がいいから、

悪い男にだまされてないか？ とか」

貴裕 「最後はいつも、ノブはそのうち、きれ

いな嫁と可愛いひ孫を連れて、『ばあちゃ

ん、ただいま』つて、帰つて来るさつて」

由紀「でも、施設に入ってからには、ノブさんの何歳の写真だろう？ 歩き始めの頃の写真だと思っけれど、餅を背負った、かわいらしい写真をみんなに見せて『ホラッ可愛いでしょ？』これ私の孫、来年は小学校に上がるの、もう、漢字で名前がかかるんだから、すごいでしょう？』って」

亮「あんなに可愛がってた由紀の顔と、由紀のお母さんの顔の区別が付かないのに」
貴裕「そう、そう、俺たちが行くたびに何回だって、同じ話をして自慢するんだから」
由紀「その写真、棺の中の、おばあちゃんの、胸に、ちゃんと入れたからね」

修平「言葉がでないよな、ちゃんと、あんなこと、思っついてくれた人がいたんだよ」

男「すいません・・・」

早苗「横浜でも、うまくいかなかったのね」

男「建設会社にもぐりこめたんだけれど、違法建築が、発覚して会社が倒産して、どうにもならなくなっって、2ヶ月前くらいにこっちに戻っってきた・・・」

修平「ついでないよな、でも、よくある話とは言われないけれど、もつと、悲惨な状態に陥ってる人は、たくさんいるからね。で、今、どこに住んでるわけ」

男「うち・・・、うちには、入れてくれたんだけど、誰も、口をきいてくれない」

修平「そうか、家出人の息子の入る余地はないか」

由紀「本家は、今、ノブさんの妹の美幸ちゃ

んが、お婿さんをとって、手広くやっっているものね」

男「親父は、世間体があるから、しばらく、うちから、出るなっって・・・」

早苗「お母さんは？」

男「親父の顔色をうかがっって、腫れ物にさわるように・・・もう、どうでもよくなっって、無性に、ムカムカして・・・強盗でもやれば、親が・・・」

由紀「バツカじゃない、そんなことで、襲われるほうはどうなるのよ」

修平「ほんとに、バカだねー、世間体、世間体って、言ってるけど、おやっさんたちは、帰っってきた内心は、安心していると思っよただ、あんなを受け入れるための、時間が欲しいだけだと思っよ、俺は」

男「ここまで逃げてきて、この店の軒下で、雨を避けて、隠れていたら・・・停電になっって、店が真っ暗になっって。じっとしていたら、なんか、ボーっとした灯りが灯っってそれ、見てたら、よくわからないうちにドアに手がかかって・・・」

早苗「わかったわ、正直に話してくれてありがたう」

男「いえ・・・」

早苗「修平さんかせ、言うとおりでと思っ、どこの親だっって自分の子供が、一番なのよあらっ、雷は、おさまったみたいね」

貴裕「ほんとだ、外は、暗くて、わからないけど、雨、上がったみたいですよ」

早苗「ところで、あなた、あ、ノブさんか、ノブさんは、歳いくつなの？」

男「28ですよ」

早苗「まあ、うらやましいこと」

修平「うん、たしかに、ゆうにあと、三倍以上人生楽しめるといっことか」

早苗「そうよ、今度のことと、また、何年か、遠回りしちゃうけれど、まだまだ、先は、長いもの」

由紀「ノブさん、このことが、片付いたら、わたしたちも、一緒に行くから、おばあちゃんのお墓参りしよう」

貴裕「俺たちも行くから、絶対行こう」

修平「時間はかかるだろうけれど、本当の親だもの、絶対に受け入れてくれるよ」

早苗「二度と、やけを起こしちゃだめだからね。一人で、ウジウジ思っ悩まないこといい、由紀ちゃんも、亮くんも、貴裕くんもちゃんと見ているからね。ノブくん、じゃあ、行くよ、修平さん、お店よろしくね」

修平「ハイよ」

早苗「みんなは、私が帰っってくるまでに、さっきの、寸劇のアイディアを、いっぱいひねり出すこと、いい」

貴裕・亮・由紀「了解！」
《カラン・カラン（カウベルが鳴っってドアが開いて、閉じる）》